

際に知った今回のレポートには、その他とされている中の種々の学部・研究所等がそれを如実に示していた。又、データー分析中に face to face による情報流通パターンが見られたのは興味深い。第2にその資料分析による雑誌の重要性（予想どおりの率）を量として把握できた。そして次の努力目標としては文献（おもに雑誌）のタイトルによる利用頻度リスト等の作成により今後の利用者への利用率・充足率の向上になるのではないかと

思われる。第3に数研における相互利用書の発行数が少なかったが、身分別の利用先、及び種類を把握することにより、自館の不備を補うための参考資料となりえるのではないか。その意味で他学部の相互利用書分析を望む。第4に第1～第3などを基に、学部間の雑誌調整などが出来れば予算のとばしい現状に一つの活路を見い出せるのではなかろうか。そのためにも、他学部の相互利用書の分析を待つものである。（49年11月19日）

UNISIST 研修会に参加して

ユニシストとは：

1967年ユネスコは、世界の科学情報流通組織を機能的に確立するため、ICSU（International Council of Scientific Union）と協議を行ない、UNISISTをスタートさせることになった（1971）。ユニシスト研修会：

1974年7月15日より8月23日まで、東京、神戸で日本政府の海外技術協力事業の一環として、ユネスコの協力を得て、海外技術協力事業団（OTCA）、日本ユネスコ国内委員会、日本ドキュメンテーション協会、および神戸大学が上記ユニシスト・アジア地域研修会を開催した。

アジア地域の7か国よりの14名の参加者があったが、オブザーバーとして参加できたものとして以下簡単に感想をのべてみる。

講義および研修内容は主としてインフォメーション・ネットワーク、ドキュメンテーションに関する理論的なもので占められ、ユニシストの世界科学技術情報システムの計画等の講義がそれに加わった。その内容の個々についての詳細は、ここに記すことはできないが、全体としていえることは、アジア地域の発展途上国よりの参加者を対象としているため、インフォメーション・ネットワークの理論的な講義およびその必要性を主眼においたものである。

一般的な知識としてもっているものを、系統的

に整理する上において、講義、ディスカッションのもつ価値は大きいものがあつた。

ここで得たものをどのように生かしていくかは今後の課題であるが、過去の知識、情報の蓄積を行なってきた図書館が、カーレント・アウェアネスのみならずリトロスペクティブの面において積極的にインフォメーション・ネットワークに係わるものであるとすれば、『わが国の図書館事情は』と更めて問いなおさねばならないと思う。

1975年秋に予定されている第3回日米図書館会議のメイン・テーマが図書館協力であることから、科学情報流通機構の整備こそが図書館界において今日的な課題になっている。

わが国の図書館の多くが過去の図書館資料の中への埋没、行政組織上の未発達等の諸問題の重荷を、どうにかもちこたえるのに精一杯の感じもしないでもない現在、科学情報流通のシステム化を理論的には必要としながらも、現実には、当面する問題に追われているのではないだろうか。

広く世界的な視野より情報流通の理念に立ち、更めて図書館機構、組織を検討することにより、内部的な諸問題の解決の方向を見出すことも図書館の近代化につながるであろうと、今回研修会に参加して得た感想の一つである。

（教育学部図書室 辻 武夫）